

# 携<sup>シテ</sup>帶<sup>ヲ</sup>弟子<sup>シメヨ</sup>得<sup>ルヲ</sup>入<sup>ニ</sup>紅塵<sup>ニ</sup>

訳

先生。私めをお連れくださり、浮世<sup>うきよ</sup>に入れてください。

古典小説『紅樓夢<sup>こうろうむ</sup>』の冒頭のセリフ。主人公がまだ仙界の石だったころ、行きずりの僧に懇願した言葉。「弟子」は、相手を「師父」（師匠、先生）に見立て敬意を払った自称。「紅塵<sup>こうじん</sup>」（赤茶けた土ぼこり）は、人間関係がわずらわしい俗世間、浮世<sup>うきよ</sup>、娑婆<sup>しゃば</sup>（仏教用語）の意。書き下し文は「弟子を携帯して紅塵に入るを得しめよ」となる。

ことわざや標語は、普遍的だ。いつ、誰が口にしてもサマになる。

名言は違う。「名言」にはドラマチックな個性がある。実在の人物であれ、架空のキャラクターであれ、名言や名セリフは、その言葉を吐いた彼ないし彼女の人生の一部だ。時代背景とか、名言を口にした人の胸に秘めた思い、人生のドラマを知らねばならない。

中国では『水滸伝<sup>すいこでん</sup>』、『三國演義<sup>さんごくえんぎ</sup>』、『西遊記<sup>さいゆうき</sup>』、『紅樓夢』の四つの古典長編小説を「四大名著」と呼ぶ。

『紅樓夢』の作者は十八世紀の不遇の文人・曹雪芹<sup>そうせつしん</sup>である。彼の家は名流だったが、政治的な理由で落ちぶれた。現行の『紅樓夢』全百二十回（昔の中国の小説の「回」は、章の意）のう

ち、曹雪芹は極貧生活の中で八十回まで書き、残り四十回は曹雪芹の死後、門人の高鶚<sup>こうがく</sup>が書き継いだとされる（書き直し説もある）。

『紅樓夢』は枠物語<sup>わくものがたり</sup>である。絵画を額縁という枠で囲むように、『紅樓夢』本編の物語も、ファンタジー小説風の前日譚<sup>ぜんじつたん</sup>の中にはめこまれている。

太古の昔、宇宙が傾き、空が割れた。神話時代の女神である女媧<sup>じょか</sup>は、岩ほどの大きさがある魔法の石を三万六千五百一個作り、それで空の割れ目を埋めた。石は一個だけ余った。その石は、世界の果ての山のふもとに捨て置かれた。なまじ魔法の石だったので、知恵がつき、わが身の孤独を嘆いた。

「木石<sup>ぼくせき</sup>」という漢語がある。人の心をもたぬもの、の意だ。しかし、天空の一部になりそこねたこの石は、木の人形ピノキオや、『オズの魔法使い』のブリキ男と同様、人の情にあこがれた。そこへ、僧と道士（道教の僧侶）の二人連れが通りかかった。正体は仙人らしい。石は懇願した。

如蒙<sup>にょもう</sup>発<sup>はつ</sup>一点慈心、携帶弟子得入紅塵、在那富貴場中、溫柔鄉裏受享幾年、自当永佩洪恩、万劫不忘也。

口語体で意識すると「お慈悲でございます。私めを、どうか娑婆の浮世に連れて行ってく

ださい。セレブの生活とやらを、男女の愛の巢とやらを、何年かでも味わわせてください。御恩は未来永劫、忘れません」。文語体で直訳すると「如し一点の慈心を発するを蒙り、弟子を携帯して紅塵に入るを得せしめ、那の富貴の場の中、溫柔郷の裏に在りて受享する」と幾年ならしめば、自ら当に永く洪恩を佩すべく、万劫、忘れざるなり」。

僧と道士は、石に説いた。浮世は有為転変の無常に満ち「またたく間に喜びの頂点から悲しみが生まれ、人は死に、物は変わり、ついには全てが夢と消え、空に帰す。行かぬほうがよからう」。しかし石の気持ちは堅かった。

孤独な石は、魔法により美しい宝玉に変えてもらい、人間界に転生し、賈宝玉という名の貴公子になった。中国語では「賈」は「仮」（「うそ」「にせもの」の意）と同音である。彼は前世の記憶を失い、貴族の大邸宅「大観園」に住み、薄幸の美少女・林黛玉をはじめとする女性たちとの交情、優雅な生活、家の没落、孤独など、人生の酸いも甘いも体験し尽くす。

中国では『紅樓夢』は今も大人気である。映画や舞台劇、テレビドラマ、近年ではインターネットの恋愛ゲームにもなっている。日本では、四大名著の他の三作品ほど読まれていない。『紅樓夢』は、「ものあわれ」「みやび」「諸行無常」など、日本の『源氏物語』にも通ずる繊細さにあふれている。逆説的だが、それゆえ、わざわざ中国から輸入する必要がないのであろう。

『紅樓夢』冒頭の紅塵の話を読むと、歌人の大石順教尼（一八八八―一九六八）を思い出す。

彼女は満十七歳のとき、錯乱した養父に日本刀で両腕を切断された。障がい者が今より生きにくい時代だった。「尼にしてください」と高僧の藤村叡運に頼むと、叡運は「まず人の妻、人の母になってからだ」と諭した。その後、彼女は画家と結婚。子も生まれたが、夫に浮気され離婚。生活のため、筆を口にくわえて書画を描き、女手一つで子を育て、関東大震災の修羅場も経験。紅塵の悲しみも喜びも経験し、四十五歳で出家。有徳の尼僧となり、人々に慕われた。

もし彼女が紅塵から逃げて若いうちに仏門に入っていたら、形だけの尼で終わっていたかもしれない。紅塵は、つらい「憂き世」も、浮かれ楽しむ「浮き世」も、別の大きな世界とながっている。

加藤徹『漢文で知る中国』（NHK出版、2021年）